

子ども健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)
論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Validity of the ESSENCE-Q neurodevelopmental screening tool in Japan

和文タイトル:

日本における ESSENCE-Q 神経発達スクリーニングツールの妥当性

ユニットセンター(UC)等名: 高知ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Developmental Medicine & Child Neurology

年: 2024 DOI: 10.1111/dmcn.15956

筆頭著者名: 安光ラエヴェル 香保子

所属 UC 名: 高知ユニットセンター

目的:

本研究では、神経発達障害の簡易スクリーニング質問票である ESSENCE-Q (Early Symptomatic Syndromes Eliciting Neurodevelopmental Clinical Examinations-Questionnaire) の妥当性を評価することを目的とした。

方法:

エコチル調査に参加する子ども(77,612 人)が 2 歳半時に、保護者に対し、11 項目からなる ESSENCE-Q による質問票調査を実施した。発達障害の診断に関する情報は 3 歳時に保護者より収集した。ESSENCE-Q の各項目は 2 値(懸念無: 0・有: 1)で採点され、総得点の範囲は 0~11 となる。ROC 解析などを用い、ESSENCE-Q の総得点と各質問項目について、発達障害の診断有・無の 2 群で比較した。

結果:

854 名(1.1%)の発達障害の診断が報告された。ESSENCE-Q スコア合計のカットオフ値を 3 とし、それ以上のスコアで発達障害をスクリーニングできるかを検討した場合、ROC 曲線下面積(AUC)は 0.91、感度 84.9%、特異度 84.8%、陽性的中率 5.9%、陰性的中率 99.8%であった。質問項目別では、発達障害の診断の有無によって、コミュニケーションに関する懸念(診断有 89.5%・無 14.2%)および発達全般に関する懸念(同 80.2%・7.4%)が有意に異なっていた。ESSENCE-Q の総得点は、日本版 Ages and Stages Questionnaire (ASQ-3)の得点と中程度の負の相関を示した($r = -0.36, p < 0.001$)。

考察(研究の限界を含める):

2.5 歳児の保護者が回答した ESSENCE-Q は、スクリーニングツールとして有用であり、特に高い陰性的中率により、発達障害の疑いのない子どもを除外できるツールであることが示唆された。本研究で陽性的中率が低かったことについては、対象となった子どもの年齢が小さく、まだ発達障害の診断数が少なかったことが主要因と考えられる。本研究の主な限界としては、発達障害の診断の情報が保護者の報告であることが挙げられる。

結論:

保護者が回答した ESSENCE-Q は、特に、発達障害の疑いのない子どもを除外できるスクリーニングツールとして有効であることが示唆された。子どもの成長とともに発達障害の診断例が増える可能性が高いことから、ESSENCE-Q のより長期的な予測妥当性については今後の追跡調査が必要である。